

# 10 「さぬきの夢 2009」 導入で小麦の生産拡大!

## ■ 管内麦作を行う生産者及び集落営農組織等 ■

(中讃農業改良普及センター 松浦 寿 山田浩三 原井則之 高八 弘 片桐弘樹  
山地茂伸 ○三木 洋 山田千津子 杉村隆之)

### ●対象の概要

本県産小麦「さぬきの夢」は「さぬきうどん」の原料として実需者から高い評価を受けており、購入希望数量が生産数量を上回る状況が続いている。

中讃農業改良普及センター管内の小麦は、平成24年産まで「さぬきの夢2000」を栽培していたが、脱粒による収量の低下や製麺適性の課題を改善した「さぬきの夢2009」が開発されたことを契機に、平成25年産から全面的に切り替えた。

### ●課題を取り上げた理由

小麦は、播種時期の気象や土壌条件が播種面積の増減に影響するとともに、単収及び品質に大きく影響するため、ほ場の乾田化による適期播種や生育期間中の降雨による湿害回避技術が必要とされた。

また、実需者ニーズに応じた小麦の生産数量確保に向け、より一層の作付拡大が必要となった。

さらに、品種面では「さぬきの夢2000」は脱粒などによる減収要因を栽培技術指導で補うことが難しいため、こうした課題を改善した小麦新品种「さぬきの夢2009」の導入が急がれた。

### ●普及活動の経過

#### 1 「さぬきの夢2009」生産計画の把握

県内では平成22年産からJA香川県中央地区営農センター管内の一部地域で本品種の試験栽培を開始し、その後順次面積を拡大し、平成25年産には中讃管内を含む県内全域の小麦を本品種へ切り替える計画が示された。

この計画を踏まえ、当普及センター管内の麦生産者に対し本品種の切り替えについて周知した。

#### 2 「さぬきの夢2009」への全面切り替え周知

平成24年には、小麦品種の全面切り替えと本品種の品種特性を周知するためのポスターを

作製し麦生産者や関係機関・団体へ配布した。ポスターでは、収量性及製麺適性など「さぬきの夢2009」よりも向上した点についてPRした。また、カントリーエレベータでの荷受時に合わせて麦類生産者へ周知を図った。



「さぬきの夢2009」推進ポスター

#### 3 本品種導入による麦作推進

管内JA支店単位で毎年、麦作推進大会を実施しており、平成24年秋の推進大会では、「さぬきの夢2009」導入を契機に前年産より作付面積1割以上の拡大」をスローガンに作付推進を図った。

また、実需者ニーズに応じた高品質麦の安定供給のために、品質及び単収向上(単収は前年産より1割アップ)を推進した。

特に、近年播種時期の降雨により適正播種や適期播種が難しく品質及び収量低下の要因になっていることから、排水対策とともに播種晩限を設定したうえでの作付推進を実施した。

なお、平成26年産においても「作付面積1割以上拡大」は継続して推進するとともに、経営所得安定対策加入者への作付拡大の重点推進

を図っている。

さらに、当普及センター管内で中讃農業改良普及協議会と連携し麦作拡大コンクールを実施し、作付拡大を実施した個別生産者や集落営農組織等を表彰することにより麦作拡大意欲の向上を図った。



麦作拡大コンクール表彰

## ●普及活動の成果

1 「さぬきの夢2009」へのスムーズな切り替え  
管内小麦生産者の本品種への全面切り替えとともに品種特性等について推進ポスター等で周知を行い、平成25年産での「さぬきの夢2009」への円滑な全面切り替えが図られた。

2 単収及び品質の向上

平成25年産は、収穫時期が少雨で経過するなど天候に恵まれたこともあり、単収386kgと例年のない高単収となり、その結果、前年産より3割以上単収が増加し、目標とした前年比1割以上向上を大きく上回った。

小麦生産者からは「さぬきの夢2000」と比べ脱粒が少なく収量性が高いなど、本品種への高い評価が多く寄せられた。

なお、小麦生産数量は、播種時期の断続的な降雨で作付面積が伸び悩んだものの、単収が大幅に増加したことにより前年対比133%（平成25年度目標対比102%）となった。

また、品質においても1等麦比率はほぼ100%となり品質及び収量とも実需者ニーズに応じた小麦生産が図られた。

表－1 普及指導計画成果指標と実績

年産	目標	実績
平成24年産	1,830t	1,511t
平成25年産	1,970t	2,005t
平成27年産	3,000t	—

3 作付面積の拡大

「さぬきの夢2009」導入により、生産者の小麦作付意欲は高まっている。

しかし、近年播種適期の降雨により適期播種が困難となり、大幅な面積拡大に至っていない状況である。

このため、平成26年産については、意欲的な農家等に対し重点的な作付推進を図った結果、538haの作付見込みとなり、前年産より16haの拡大が図られた。（平成26年1月末現在農業共済引受面積より）

特に平成26年産の播種時期は、近年にない多雨条件であったにもかかわらず新規の小規模農家や集落営農組織での作付けにより、面積拡大へと繋がった。

4 新たな播種技術による播種の安定化

多雨条件に対応した逆転耕畦立てドリル播き栽培技術については、大型トラクターを導入している農業者等で導入し、多雨条件であった平成25年播きでも比較的安定して播種が行われ、さらには本技術導入により作付拡大に繋がった生産者もみられた。



逆転耕畦立てドリル播き栽培

## ●今後の普及活動の課題

当普及センター管内では、「品質及び単収の向上」を重点に、現普及指導計画の最終目標年度である平成27年産の生産量3,000tの達成に向けて小麦の作付拡大を図っている。

しかし、新たな経営所得安定対策では平成27年産から認定農業者や集落営農組織以外は助成対象外となるため麦作推進にとってはマイナスの要因となることが危惧される。

このため、今回新規に麦を作付けした小規模農家等については認定農業者や集落営農組織などへ誘導することにより、継続的に麦作が行われるよう推進するとともに、これら集落営農組織等を中心に小麦の作付拡大を図っていく必要があると考えられる。